

令和8年1月16日

令和7年度あけぼの大豆の生育概況と今後の対策について

峡南地域普及センター

身延町産業課

1 気象の推移と生育状況

【6月中旬～7月（は種期～株の生育期）】

- ・6月上旬は、平年より降水量が多くなったが、6月中旬～7月上旬は降雨が少なく、特に6月下旬はほとんど降雨がなかった。7月中旬は台風の影響で降水量は平年よりかなり多くなったが、梅雨明け(7/18)以降は乾燥し、7月下旬の降水量は平年より非常に少なかった(平年比1%程度)。
- ・気温も高く、6月・7月の平均気温は平年比+2.0℃程度で推移した。
- ・播種～発芽までは適度な土壌水分があった圃場では、発芽は良好であったが、6月の高温や乾燥の影響で一部発芽不良となる事例も見られた。

【8月～9月（開花期～子実肥大期）】

- ・8月は降雨がほとんどなく、灌水なしの圃場では、干ばつによるしおれ症状も見られたなかで、中旬頃から開花期を迎えた。9月上旬は降雨があったが、下旬は降水がなく、9月降水量は、平年比68%と少なくなった。
- ・気温は平年に比べ高く(8月:+2.0℃、9月:+2.3℃)、落莢や不稔莢の増加に影響した。
- ・この時期は、大豆にとって最も水分が必要な時期であるため、収量に影響した。

【10月～11月（枝豆収穫期～大豆収穫期）】

- ・気温については、平年より高く推移した(+1.2℃)。
- ・10月は定期的に降雨があったが、全体の降水量は少なくなった(平年比51%)。高温・乾燥の影響で枝豆の収穫期の遅延、大豆は、青立ちの発生が見られた。

【病害虫の発生】

- ・7月～8月の高温乾燥により、「ハダニ類」による被害が見られた。
- ・気温が高いため「ハスモンヨトウ」の被害が前進化している。「カメムシ」についても発生が見られた。
- ・収穫期が遅延したため、収穫期後半の枝豆には「マメシクイガ」の被害あり。

【結莢不良の発生】※一部の園で発生

- ・7月～8月の高温乾燥による落莢や不稔莢の増加。
- ・窒素過多などによる日照不足も結莢に影響。薬剤防除の回数が少ない園も事例として見られた(カメムシによる被害と思われる)。



図1 乾燥による生育遅延(8月初め)



図2 結莢不良(撮影:9月下旬)

2 今後の安定生産に向けて

現地事例などから栽培について実施したいポイント

①灌水の実施。現地事例では、7月下旬から8月下旬にかけて7～10日間隔で1回実施。土壌の乾燥具合や排水性に応じて回数や期間を調節。

②中耕培土を2～3回行い、不定根・根粒菌の生育を促進する。

③日照条件を良くするため、株間を45cm以上にする。

特に播種を6月上旬に行う場合は、播種量を減らしてやや疎植にする。

④播種は6月中に行う(7月だと遅い)。

高温・乾燥により発芽不良を招くため、天気予報を確認し、降雨に合わせて播種する(播種後、雨が見込めない時は播種時期をずらすなど)。

発芽を良くするため:種子消毒、土づくり、土壌物理性の改善

<種子消毒>クルーザーMAXX(青色)の塗布。

<土づくり>播種の2週間～1ヶ月前に堆肥の施用。

緑肥の活用:ヘイオーツ、ヘアリーベッチなど。大豆収穫後、土壌凍結前に播種(ばらまき後に軽く耕耘、開花前にすき込む)

<土壌物理性の改善>耕うん・碎土で表層を細かく碎土。

<その他>鳥獣害対策で再播種を防ぐ:電気柵、テグス、かかしなど

⑤土壌診断に基づき不足が見られる場合は基肥で補給(特に、苦土、カリ)

⑤薬剤散布(防除)は、栽培暦を参考に3回程度実施。

令和7年度 あげぼの大豆試験内容一覧

◆曙地区

圃場		計画	えだまめ	大豆	
			収量調査	収量調査	
矢細工 試験圃場	第1	収量品質向上技術検討① (灌水システムの活用による 高温乾燥対策)	無処理	①	①
			灌水区	②	②
	第2	収量品質向上技術検討② (追肥)	無処理	③	③
			追肥① 尿素	④	④
			追肥② LPコート70	⑤	⑤
合 計			5	5	

【追肥】 追肥①: 病虫害防除と併せて液肥(開花14日後、開花28日後)試験理由→農薬散布と同時にできる。コストが1番安い。

【追肥】 追肥②: LPコート70日 施用量10kg 培土期施肥

尿素、LPコート は農務事務所で購入

【成分分析】 R7 は実施なし

◆平坦地

圃場		計画	えだまめ	大豆
			収量調査	収量調査
八日市場ほ場	収量品質向上技術検討③ (摘心)	摘心	⑥	
		摘心+LP	⑦	
		無処理	⑧	
西嶋ほ場	収量品質向上技術検討④ (白絹病①排水)	多破碎区	⑧	
		少破碎区	⑨	
		無処理	⑩	
西嶋ほ場	収量品質向上技術検討⑤ (白絹病②薬剤)	薬剤散布	⑪	
		無処理	⑫	
西嶋・八日市場・宮 木 ほ場	収量品質向上技術検討⑥ (カメムシ ※)	薬剤散布	⑬	
		無処理	⑭	
合 計			10	0

※ 別途 発生予察調査を実施

2 矢細工試験地などの試験状況について

①灌水システムの活用による高温乾燥対策

- ・開花期から子実肥大期に週2回程度灌水を実施。
- ・灌水により、莢数の増加し、**収量が増加(約 1.4 倍)**

表1 開花期以降の灌水が「あけぼの大豆(えだまめ)」の生育や収量に及ぼす影響(2025)

試験区	主茎長 (cm/株)	可販莢数 ^z (個/株)	可販莢重 (g/株)	換算可販収量 ^y (kg/10a)
灌水あり	85.2	157	555	1388
対照(灌水なし)	70.6	111	396	990

z)未熟莢・病害虫莢を除いた販売可能な莢

y)2500株/10a で換算

②追肥(尿素葉面散布、LPコート70)及び摘心の効果確認

- ・開花前～子実肥大期にかけて尿素的葉面散布により、収量向上。圃場が異なることや去年までの収量比較など勘案すると、**2割程度の収量向上**と思われる。
- ・2回目の中耕培土前にLPコート70の施用により、**1割程度収量向上**
→昨年度も収量向上効果を確認している。
- ・開花前(7月下旬)に摘心を実施。対照の方が摘心区より収量が多くなり、収量向上効果は見られなかったが、主茎長は低く、倒伏対策につながると期待される。

表2 追肥や摘心が「あけぼの大豆(えだまめ)」の生育や収量に及ぼす影響(2025)

圃場	試験区	主茎長 (cm/株)	可販莢数 ^z (個/株)	可販莢重 (g/株)	換算可販 収量 ^y (kg/10a)
矢細工 ^x	尿素	86.4	156	658	1645
	LPコート70	73.4	121	436	1090
	対照	70.6	111	396	990
八日市場	摘心	81.4	146	346	865
	摘心+LPコート70	82.0	98	309	773
	対照	91.4	112	460	1150

z)未熟莢・病害虫莢を除いた販売可能な莢

y)2500株/10a で換算

x)尿素は第2圃場、LPコート70と対照は第1圃場

③排水対策の検討

- ・アースオーガーを用いて、耕盤破碎を実施。
- ・破碎により、収量が増加する区と増加しない区があり、効果は判然としなかった。

表3 耕盤破碎^zが「あけぼの大豆(えだまめ)」の生育や収量に及ぼす影響(2025)

試験区	主茎長 (cm/株)	可販莢数 ^y (個/株)	可販莢重 (g/株)	換算可販収量 ^x (kg/10a)	土壤病害 の発生
多破碎区	94.8	113	381	953	無
少破碎区	101.8	196	646	1615	無
対照(破碎なし)	92.0	138	450	1125	無

z)多破碎:概ね10m間隔、少破碎:概ね20m間隔、6/5に実施

y)未熟莢・病害虫莢を除いた販売可能な莢

x)2500株/10a で換算



図1 アースオーガでの耕盤破碎

図2 生育期の様子(7/31)



⑤カメムシの発生消長調査

・西嶋、八日市場、宮木の計3地区でホソヘリカメムシのフェロモントラップを設置。雄幼虫の誘殺状況を調査（7月～9月）。

→西嶋：8月下旬から発生が始まり、9月上旬頃に発生量がピークとなった。

八日市場：8月中旬から発生が始まり、9月上旬頃に発生量がピークとなった。

宮木：7月から発生。8月中旬頃から発生が増え始め、9月中旬が発生量のピーク。

他の地区と比較して、誘殺数が多い傾向であった。

・大豆の莢伸長期（開花 15～20 日後；8 月下旬以降）にカメムシ類の被害リスクが高まる。

栽培暦を参考に 8 月中～下旬に 1 回目の薬剤防除、9 月上～中旬に 2 回目の薬剤防除を行う。本年の気象は高温で推移したため、カメムシの発生時期が前進化したことも想定される。地区によって発生時期や発生量が異なるので、園でのカメムシ発生状況などを確認し、防除時期を決定してほしい。

<2025 のような高温の場合、防除時期の案>

西嶋：8 月下旬頃（1 回目）、9 月上旬頃（2 回目）に薬剤防除

八日市場：8 月中旬～下旬（1 回目）、9 月上～中旬（2 回目）に薬剤防除

宮木：8 月中旬頃（1 回目）、9 月上旬（2 回目）に薬剤防除

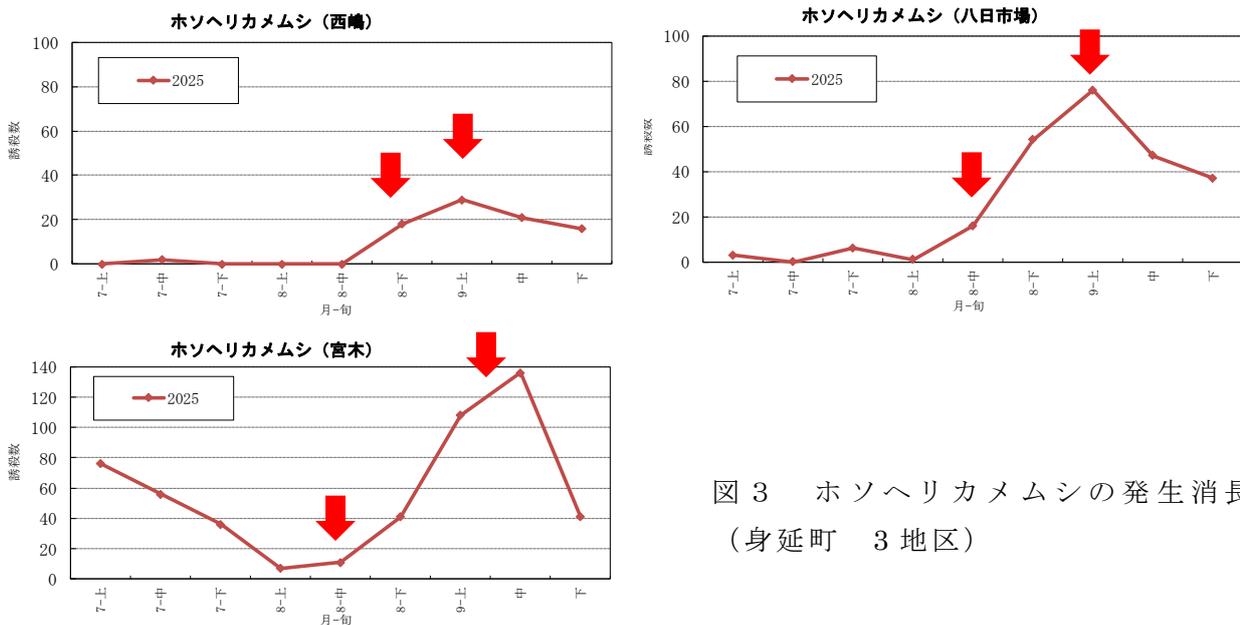


図3 ホソヘリカメムシの発生消長 (身延町 3地区)

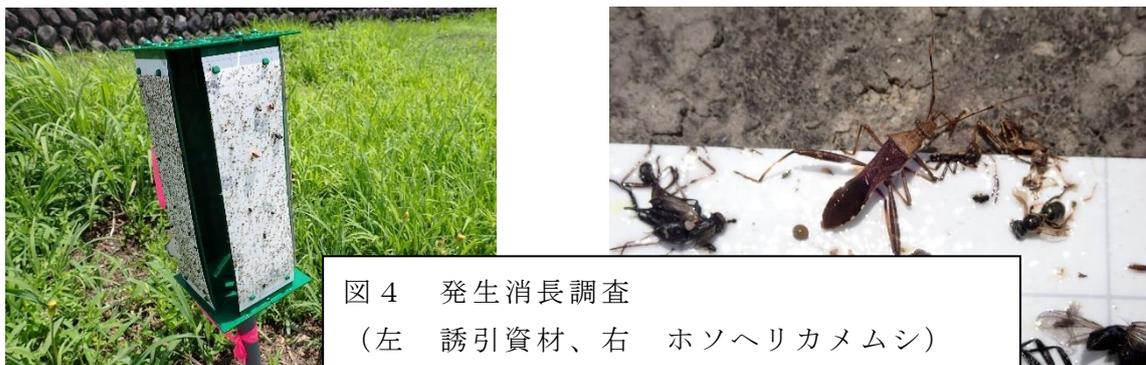


図4 発生消長調査 (左 誘引資材、右 ホソヘリカメムシ)

⑥カメムシ対策（スタークル顆粒水溶剤）の検討

- ・栽培暦の防除体系のうち、子実肥大期の防除薬剤を「スタークル顆粒水溶剤」に変えて散布。
- ・実証区も慣行区と同程度の収量を確保。カメムシ被害率も同程度（データ略）
- ・単年度の結果なので今後も検討が必要だが、トレボン乳剤よりもコストを抑えることが可能であり、活用が期待できる。

	8月中旬	子実肥大期 (8月下旬)	子実伸長期 (9月上旬)	9月下旬
実証区	スミチオン乳剤 1,000倍	スタークル顆粒水溶剤 2,000倍 加用 ゲッター水和剤 1,500倍	トレボン乳剤 1,000倍 加用 ゲッター水和剤 1,500倍	アニキ乳剤 2,000倍
対照区		トレボン乳剤 1,000倍 加用 ゲッター水和剤 1,500倍		

⑦鳥獣害防止策（獣塀くんライト）の効果検証

- ・播種前（6月上旬）に設置。電気柵とメッシュ資材と防獣ネットを組み合わせた対策を実施し、生育や鳥獣被害抑止効果の確認を実施。
- ・センサーカメラを設置したところ、サル、アナグマ、シカの姿が確認できた。
- ・対策の実施により、従来被害のあった獣害がなく、侵入防止効果及び被害防止効果が高いことが確認できた。

